

私の夢は看護師として最大限の力を誰かのために尽くし続けることだ。医師のように直接治療を施すことはできないが、看護は想像以上に大きな力を持っている。日進月歩する医療技術とともに私自身も努力を続け、多くの人と関わり命に触れる中で自分自身も成長できるだろう。「日に新た、また日に新た」甲府第一高等学校が身に付けた姿勢を忘れず夢を叶えたい。

平成二十四年卒業生 長田静香

私の夢は建築家になることです。幼い頃から、さまざまな物を創作しようという意欲を持っていたこともあり、一番大きなきっかけは尊敬する父の存在です。父は建築家であり、私に物を作る大切さを教えてくれました。その中に私が建築家を志すようになった言葉があります。それは「自分の想像、設計した物が実際に現れる嬉しさ」という言葉でした。この言葉は、私の心を動かすのに十分過ぎる魅力を持っていました。そして私はこの言葉を胸に、父を尊敬し父と同じ道を歩み、建築家になりたいと思っています。

三年 小田切覚史

私の将来の夢は県庁職員になることです。志望理由は自分が育ってきた県のことを深く考えることができるからです。しかし、最近県庁職員による不祥事が山梨県に限らず、相次いで起こっています。物事の正否をはっきりと見極められること、それこそが、大人として必要不可欠なことだと私は思います。過去の自分の理想を裏切らない人間になりたい、そのためには、努力を惜しまないようにしたいです。

二年 小澤佑一朗

「ナオコは日本人なのに、なんで英語が話せるの？」シヨクだった。外国人から見た日本人はこの程度でしかないのだ。去年一年間のスイス留学を通して私が痛感したのは、日本人は、「自分をアピールする」という事についての自信が全くない、ということだ。私達は、既に英語を六年以上習っているのに、「完璧に話す」事にとらわれすぎていのではないだろうか。私の将来の夢は国連職員になることである。その舞台で、美しい日本を、もっともっとアピールできる人材になりたい。

三年 荻野奈緒子

在校生 私の夢

私の将来の夢は、情熱を持った体育教師になることだ。私には憧れている先生がいる。その先生は、柔道の顧問でもあった。時には優しく、時には厳しく、どんなに大変でも生徒のことを思いやり、接してくれる先生だ。「教師」身近けどまだまだ遠い存在だ。「夢」は見るだけでは何も始まらない。自ら積極的にチャレンジし、経験を積んで憧れの先生のような存在になれるように、一日一日を大切に頑張りたいと思う。努力あるのみ。

二年 桂原幸世

私は一高へ入学するとき、一高は何が一番なのだろうか、と考えたことがある。伝統、文武両道、強行遠足。入学当初はこのぐらいしか思いつかなかった。しかし、三年間この一高で過ごし卒業する今、三年前の自分に自信をもってこう答えることができる。一高は一番幸せな学校である、と。同窓会や先生方など多くの人に支えられ私は毎日、本当に充実した高校生活を送ることができた。私は甲府一高の卒業生であることに誇りを持ちこれからも日々、精進していきたい。

平成二十四年卒業生 瀬川紘幹

僕は、強行遠足に魅せられて甲府一高に入学した。小さい頃から水泳と陸上の長距離をやっていたのでそれなりに自信はあったが、初めての七〇kmを超える距離を走ることは想像以上に辛いものだった。しかし、未知への挑戦、自分の限界へ挑戦した後のゴールは清々しく充実感にあふれ、こんな体験ができる一高へ入学して本当によかったと思った。僕の強行遠足はあと二回ある。陸上部の仲間とトレーニングに励み、長い強行遠足の歴史に記録が残るようなタイムを目指して走りたい。

二年 望月光樹

一高へ入学してから、早くも三年目に突入しようとしている今、私の一高へ対する思いは一高で過ごす時と比例し日々強く熱くなっています。「温故知新」という言葉の如く、数々の先輩方が築いてきてくださった伝統を基に、更なる一高の発展を目指し、在校生や卒業生を始め、先生方や地域の方など、多くの方々から愛されるような一高づくりをしていきたいです。

生徒自治会長 三年 西野四季

強行遠足 PTA同行記



強行遠足 PTAボランティア参加して
佐藤 光政 (昭和四十九年生)

息子の入学に伴い、四十年ぶりに強行遠足に関わるようになった。二度とも救護所付近の道路の分岐点の警備案内を行った。

強行遠足の実施全体については、我々の頃と比べ、相違点(以下に列挙)も多々あり、過ぎた年月の長さも感じた。

- ① 交通量の増加や、安全対策のため、コース中の間道の距離が増えたこと。
- ② 支援ボランティアの数が参加生徒数とほぼ同数となる位の手厚い体制となったこと。
- ③ 先生方の準備が早くから長い時間をかけて周到に行われていること。
- ④ 新たなツールが登場し、学校側でもその一々の扱いに対して指示規定を作成していたこと(スポーツ用品店の強行遠足対策の推奨靴の販売、服装の変化、携帯電話、コンビニの登場等)。



〇〇〇〇〇〇〇〇

息子から、アドバイスを求められた時には、流石に上記の変容もあり、装備品についての話は憚られたが、基本的な考え方ということで、私が先輩より言われた言葉を伝えた。「強行遠足でゴールできるか否かは、体力の問題というよりも行こうという意思を貫けるかどうかの問題だ」と。この言葉を理解してくれたかどうかはわからないが、体力的な不安を若干感じていた息子が、二度とも、何とかゴールできてほっとしている。

今更ながら、世代や時代を超えて、喧々譁々と話の尽きない一高伝統の行事「強行遠足」の有難さを感じている今日この頃である。

平成二十三年

強行遠足に参加して

二年 佐藤 正顕

強行遠足への参加は二度目。去年は、一日目の最初から、雨が降り始めて止まなかったため、体は冷えるし、疲れるしとうことで、ゴールは遠く大変だった。初めての強行遠足ということで、父から話を聞いていたが、正直なところはよくわからないままに始まって終わったという感じだった。今年も天気も良く、去年の経験もあり、様子がわかっていたのでゴールへの不安はなかった。

できれば、父達が経験した百キロ以上の強行遠足を経験してみたいと思う。それから、きつところや困っていたところで声をかけてくれた父の友人の方々に感謝している。